

いのち 生命のにぎわいとつながり

No. 78

令和5年6月

トウキョウサンショウウオは、千葉県に生息する唯一のサンショウウオです。成体に出会う機会はあまりありませんが、早春の水辺でバナナ状の卵のうを見たことのある方は多いのではないのでしょうか。そんなトウキョウサンショウウオに、いま、危機が迫っています。

トウキョウサンショウウオの受難



トウキョウサンショウウオの成体と卵のう

トウキョウサンショウウオ (*Hynobius tokyoensis*) は千葉県、神奈川県、東京都、埼玉県、栃木県南部に分布する日本固有のサンショウウオです。丘陵地の林内に生息するため普段はあまり見かけませんが、繁殖期の1月から4月頃にかけては隣接する水田や水路、湧水の溜まった水たまり等の浅い止水に集まり、バナナ状の卵のうを枯れ枝や落ち葉に産み付ける様子が観察できます。

本来、里山等で見られる身近な生き物でしたが、近年生じた様々な人為的な影響を受け、各地で減少しつつあります。本稿では、トウキョウサンショウウオが置かれている危機的状況や減少要因について紹介します。

CONTENTS

- 1 トウキョウサンショウウオの受難 1
- 2 生命のにぎわい調査フォーラムを開催しました 3
- 3 生命のにぎわい調査団の現地研修会を開催しました 3
- 4 千葉県の希少種（マルガタゲンゴロウ） 4

◎千葉県内での生息状況

千葉県内では、南部（館山市・南房総市）から北東部（銚子市）にかけて、丘陵地帯を中心に分布しています。

分布域は狭くないものの、近年生じた様々な人為的な影響を受けて各地で減少していることから、2011年に発行された千葉県レッドデータブックより最重要保護生物（ランクA）に選定されています。加えて、環境省のレッドリストでは2006年より絶滅危惧Ⅱ類（VU）に選定されています。

◎主な減少要因

主要な減少要因としては、開発による生息地の消失や環境悪化、耕作放棄による産卵場所の消失（乾燥化）、アライグマやアメリカザリガニなどの外来種による捕食、販売目的の卵のうや成体の過剰採集（乱獲）等があげられています。

近年、特に注目を集めているのが、ネットオークション等での販売を目的とした乱獲による影響で、産卵のために水辺へ集まってきた成体や産み落とされた卵のうが根こそぎ持ち去られることで、その地域の個体群を消失させることが懸念されています。

トウキョウサンショウウオは成熟までに5年ほどかかり、卵のうや幼生の段階でその多くが死亡（被食など）すると考えられています。そのため、一度

に多くの成体や卵のうが取り除かれてしまうと短期間で個体数が急激に減少し、個体群を維持する上で深刻な状況に陥る恐れがあります。

◎特定第二種国内希少野生動植物種への指定

トウキョウサンショウウオの個体数回復を目指した生息環境の整備等が各地で進められている中で、種の存続を脅かす乱獲への対策として商業流通への規制が求められていました。2020年に、種の保存法によってトウキョウサンショウウオが特定第二種国内希少野生動植物種（以降、特定第二種）に指定され、販売・頒布を目的とした捕獲や譲り渡し等の行為のみが禁止されることとなりました。これにより、捕獲や飼育等を伴う保全活動（個体数のカウントや測定等）を妨げずに、過剰採集を規制しながら生息域内での保全対策を促進することができるようになることが期待されています。

◎減少要因の改善と今後の課題

特定第二種への指定によって商業流通が規制されたことで、主要減少要因の1つであった乱獲を早期に解消することに繋がりました。しかし、生息地の改変や耕作放棄による影響には歯止めがかかっておらず、近年、分布拡大中のアライグマによる食害も各地で生じています。アライグマは繁殖のために水辺へと集まった多くの成体やそれらが産み落とした卵のうを食害するため、乱獲と同様に短期間でトウキョウサンショウウオの個体数を激減させることが懸念されています。従って、今後はアライグマからの捕食圧を軽減させるよう防除対策を進めていくことが重要課題となってきます。アライグマの防除に加え、トウキョウサンショウウオの成体や卵のうが捕食されないように囲いで覆うなどの対策をとっている地域もあるようです。

トウキョウサンショウウオのように複数の人為的要因による影響を受けて減少する生き物に対しては、優先的に改善する必要のある減少要因を早急に整理するとともに、各要因に対する個別の対策を同時に進めていくことが望まれます。今後、身近にいたはずの生き物が希少種になってしまわないよう、我々にできることを考えていきたいと思っています。



トウキョウサンショウウオの主要な減少要因

(加賀山 翔一 千葉県生物多様性センター)

生命のにぎわい調査フォーラム を開催しました 令和5年3月4日(土)

生命のにぎわい調査団は令和5年3月末で設立から14年8ヶ月が経過し、団員数が1,733名、報告件数は140,000件を超えました。

令和5年3月4日(土)に、中央博物館講堂で調査フォーラムを開催し、51名(団員と同伴者43名、職員8名)が参加して、千葉県の生き物について情報交換しました。今回はセンター職員による2件の話題提供と、生き物調査報告のデータ解析例の紹介ののち、調査団員5名から観察事例を紹介いただきました。また、調査団員からの投稿による写真コンテストの結果発表、受賞作品に合わせた詩の朗読も併せて行いました。

1 千葉の生き物ニュース：最近の話題

●「千葉で見つかったシロアリのウンチの化石」

伊左治 鎮司

●「にぎわい投稿写真から見る千葉の生物多様性」

大島 健夫

日本で初めて報告されたシロアリ類の糞化石(コプロライト)と、これまでに団員から投稿された貴重な写真から読み取れる千葉の生物多様性について紹介しました。

2 生き物調査報告のデータ解析

加賀山 翔一

にぎわい調査団の報告によって得られた生き物の分布情報と、専門家の調査によるデータを比較し、調査団員からの投稿が学術的に信頼でき、調査手法として有用であることを示しました。

3 調査団員からの情報提供・観察事例紹介

●「千葉公園のキングロハジロ個体数調査」

小原 邦夫

●「(猛禽類) ミサゴの狩りと狩り場の争い」

高見 等

●「オシドリ雄の換羽状況(エクリプス化)紹介」

千葉 公

●「私がカメムシ沼にハマった訳」

望月 政樹

●「いきものがたり」

山本 博志

4 令和4年度写真コンテストの審査発表

フォーラム参加者の投票により、応募36作品から最優秀賞と優秀賞を決定しました。これらの作品は、センターの年報の表紙などに使わせていただきます。また、生物多様性センター賞も設けました。受賞作品には、ポエトリー・スラムW杯日本代表詩人でもある大島健夫が、受賞作品に詩を添え、一番のお気に入り写真に「大島賞」を捧げました。

応募作品36点は、トピックス展「生命(いのち)のにぎわい」写真展として、3月7日(火)～5月7日(日)の期間、中央博物館で展示され、7,977人にご来場いただきました。

(伊左治 鎮司 千葉県立中央博物館)



★最優秀賞★ エイリアン…?浮上! 千葉 公さん

生命のにぎわい調査団の 現地研修会を開催しました 令和5年5月20日(土)

今回の研修会は千葉県立中央博物館分館海の博物館の前の磯(勝浦市)で磯の生き物を観察し、観察会の後に海の博物館の展示を見学しました。

当日は少し肌寒く、時折小雨が降る天気でしたが、34名の団員にご参加いただきました。講師に海の博物館主任上席研究員の柳さん、立川さんを迎え、海の生き物について解説をしていただきました。

◎砂浜や磯での生き物の観察

海の博物館から階段を降りて海岸に向かうと、石が転がる砂浜があり、その先には潮が引くとあらわれる磯が広がっています。向こう側には、勝浦海中公園の白い展望塔が見えます。



砂浜での観察

まずは、砂浜で石をそっとひっくり返してみます。すると、ヒライソガニが出てきました。雄雌の見分け方などの講師の話聞きながら、磯の方へと進みます。ここから、各自で自由に生き物を観察します。磯の岩場の先端には強い波があたり、白い波しぶきが飛んできます。磯の岩の表面はヒジキで覆われ

ています。ヒジキは春に最盛期を迎え、これから夏にむけて少なくなっていくます。季節により磯の風景は移り変わっていきます。

岩のくぼみなどには、海水が溜まった潮だまりができます。潮だまりの中や、岩の表面や割れ目をのぞくと、たくさんの小さな生き物たちの暮らしが見えてきます。

◎ウミウシ類と危険生物

いろいろな生き物を容器に入れて観察しながら、講師の解説を聞きました。特に参加者からの人気が高かったのは、ウミウシ類と危険生物です。



多様なウミウシ類と巻貝類、クモヒトデ類

今回は、アメフラシ、ダイダイウミウシ、ミスガイ、ムカデメリベ、キヌハダウミウシ、カメノコフシエラガイ、クモガタウミウシ、サガミミノウミウシ等9種以上のウミウシ類が観察できました。ウミウシ類の食性は多様で、藻類食のほか、肉食で刺胞動物、ホヤ類、他のウミウシ類を食べるものがあるそうです。

さらに、ガンガゼ（ウニ類）、ハオコゼ（魚類）が観察できました。どちらも棘に毒がある危険生物として知られています。参加者からは、今後の活動で気をつけるため、実物が見られてよかったとの声がありました。なお観察後は、全ての生き物を元の場所に戻しました。

◎海の博物館の展示の見学

最後に、海の博物館の展示を見学しました。参加者は、先ほどまで実物を観察していた生き物の展示を見つけ、熱心に見学していました。今回は、様々な生き物を自分で見つける体験とともに、専門家の解説を聞くことで、より深く生き物を知る機会になりました。また、房総の海の豊かさ、生き物の美しさや危険さを知ることができました。次の研修会もみなさまのご参加をお待ちしております。

（下稲葉 さやか 千葉県生物多様性センター）

千葉県の希少種

マルガタゲンゴロウ



（千葉県レッドリスト：重要保護生物B）

最大で体長15mmほどになり、黒褐色の点がちりばめられた漆工芸品のような美しい鞘翅を持つ中型のゲンゴロウであるマルガタゲンゴロウは、令和5年1月より、トウキョウサンショウウオと同じく、種の保存法に基づく特定第二種国内希少野生動植物種に指定されました。特定第二種制度とは、人間が手を加えることで生態系が成立している、里地や里山のような二次的自然の希少種を対象にした制度で、トウキョウサンショウウオの項でも触れられている通り、販売・頒布を目的とした捕獲や譲り渡し等の行為が禁止されるものです。

もともと、日本全国の浅いため池や水田に普通に生息する昆虫であったはずのマルガタゲンゴロウは、まさしく、人間が手を加えることで成立している二次的自然に暮らす種であると言えるでしょう。しかし、現在では、その姿を見かけることはめっきり少なくなりました。その減少には、圃場整備による乾田化やため池の埋め立て、耕作放棄による水田そのものの消失、さらに農業による水質汚染、アメリカザリガニのような外来種による影響といった複合的な要因が介在しています。

ゲンゴロウの仲間は、日本に130種、千葉県でも30種以上が記録されています。そのうち、いわゆるゲンゴロウはすでに県内から絶滅し、シャープゲンゴロウモドキは「千葉県シャープゲンゴロウモドキ回復計画」のもと保全事業が行われています。それ以外にも数多くの種が希少種となりつつあります。身近な水辺の虫であったゲンゴロウ類の衰退は、この国の二次的自然の姿そのものの変化を示しているのかもしれない。

（大島 健夫 千葉県生物多様性センター）



生物多様性ちばニュースレター No.78 令和5年6月30日発行

編集・発行 千葉県生物多様性センター（環境生活部自然保護課）

〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2（千葉県立中央博物館内）

TEL 043(265)3601 FAX 043(265)3615 URL <https://www.bdcchiba.jp>

